

交通警察官を装った、白塗りのオートバイに白ヘルメット姿ののっぺりとした手配写真をいまでも覚えていいる。捜査は難航し、昭和50年12月10日、事件は時効成立となった。映画は「ロースマリーの赤ちゃん」「アポロンの地獄」「真夜中のカウボーイ」、邦画では「心中天網島」「少年」「かげろう」そして「男はつらいよ」が封切られている。わたしはこの映画のどれもみていた。ちまたには「時には母の

ない子のように」「ひとり寝の

子守唄」「フランシーヌの場合

は」の反戦フォークが流れていた。

「泣きつつらに催涙弾」「論よりゲバルト」。東大安田講堂に残された学生の落書きである。稽古場には新劇反戦と書い

た。この時代に与謝野晶子の「君死にたもうちことなかれ」を読んだ記憶がある。ガールフレンドが貸してくれた本だったのかもしれない。その本は仲間のだれかにまた貸しをして、ついに返すのはこなかった。本は貸して

た時代であった。

若い連中には充滿していた時代である。新宿では「やがて新宿

灰になる」と赤テントの唐十郎が若者をあおっていた時代であった。韋駄天の時代である。

了見が狭い上司についた部下は哀れである。手柄はわが物にするし、嫉妬心が旺盛でうたぐ

り深い。部下のやることなすこと、に、ちよっかいを出したがる。岡本喜八監督が独立プロで「肉弾」を撮影することになった。

ある。ところが劇団の上司である。ところが劇団の上司である。幹部は「外の仕事を手伝う」とは許さない」というのである。了見の狭さゆえの嫉妬心である。わたしは「器材を運んだり、雑用係をするだけです」と反対を押し切って撮影に参加した。師匠が映画会社東宝を離れて少ない予算で映画を撮るといふ。手伝って当然である。

独立プロが流行っていた時代である。新宿のATGである。1千万円映画といった。家屋敷を抵当に入れて映画を撮るといわされた。そこまでして撮りたい映画があるのは、ある意味では幸せなことである。合宿で1カ月の撮影に参加した。旅費すらが持ち出しであった。

模索していった時代

たヘルメットとゲバ棒が置いてあった。わたしは「演劇人なら演劇で物をいえ」と不満であった。わたしは、これらに「影響

されまい、影響されまい」とも

がきながら演劇をしていた。模

索の時代であったといっている。

いや、時代が模索をしてい

る。わたしは「時には母の

をやらなければ」。その思いが

の障害も問題もなかったはずで

(松浦市出身)